
幼馴染

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染

【著者名】

碧

N6251U

【あらすじ】

一つ年下の幼馴染みとのたわいのない日々。それはずっと続くのだと私は信じていた。変わらないものなんてないのに。

はあーと吐く息が白くて「ああ、冬が来たなあ」と感じた。冷たい風が肩でそろえた私の髪を撫でる。私の名前は雨沢秋^{あめさわあき}。近所の県立柏木高校に通う一年生だ。

「冬だなあ・・・・」

しみじみとつぶやく私に隣を歩いていた一つ下の幼馴染である風間勇太が子犬のような無邪気な笑顔で。

「ねえねえ、アキ姉。夏の風物詩といった何を思い浮かべる?」

私の情緒をぶち壊す。

ええい!! 人がせつかくしみじみと日本の四季を感じているというのにこいつは!! しかも今は十一月!! 通学中のいまも雪がちらついているような中でどうして夏の風物詩なのよ!!

「コーダ・・・・。そういう質問は夏にしなさい。ナ・ツ・ニ!!」

ギロリと必殺の睨みをおみまいするが生まれたときからの付き合いであるコーダには通用しない。コーダはご近所・学校で「子犬のように可愛い」と女子に人気な無邪気さで私の顔を覗き込んでくる。

「だつて思いついたのが「冬」だから仕方ないよ

にこやかにキッパリ言い切った。・・・・ああ、そうですか。妙な脱力感から思わず手で顔を覆う。頭、痛い。大体こいつは昔から言うことすること突拍子がなくていつもいつも私を巻き込んで

結果的にその後始末を全部私がする破目になつて……あ、思い出したらものすごく腹が立つてきた。

一人ご立腹な私など知る由もないコータがひょつこりと私の顔を覗きこむ。

「で、アキ姉。僕の質問の答えは?」

「まだ、引っ張るか……」

しつこい奴め、と舌打ちする私だが、最終的にコータに甘い私は溜息混じりに答えてやるつもりになつていた。やれやれ、いい加減に幼馴染離れさせないといけないってわかつてはいるんだけどね。。。

と、そこで私はコータの身長が記憶より高くなつてゐるのに気付いた。

「あれ? コータ背伸びた?」

しげしげと隣を歩くコータと自分の身長を比べる。うん、やっぱり私より高くなつていて。

「確かに去年まで私と同じくらいだったよね。うわ、こいつの間に抜かされていたんだろ?」

何気にショックを受ける私にコータは呆れたように溜息を付いた。

「あのね。高校入る前にはもうアキ姉の身長を越していたよ

「うそ……こいつも一緒にいたのに気付かなかつた……」

それとも一緒にいたから気付かなかつたのかな？

「いや……でも、こいつ、感慨深いもんだねえ。私の弟分も立派に成長しているんだ」

まるつきり親戚のおばちゃんのような発言だが私の偽らざる本心だ。うんうん。年長者は若輩者をこいつやって見守つていいくのね。だが、なぜだかコーダの眉がぴくっと不機嫌そうに跳ね上がる。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

あからさまに氣に入らないといった感じにコーダが黙り込む。そして本気で不本意そうに頭を搔いた。

「アキ姉、都合よく忘れているみたいだけど僕はアキ姉の「弟」じゃない……僕は「男」だよ」

真剣な声。なにかを壊しそうなほど威力秘めたその言葉はだけどその時の私にはまったく通用しなかつた。

「へ？突然なに言い出すのよ。あんたが女だったら逆に怖いわよ」

私の軽口にだけどコーダは乗つてこなかつた。見た事のないぐらいい怖い真剣さで私の肩を掴む。そのせいで自然と私たちには顔を合わせる体勢になつた。

「……………背だつてもつと高くなる。体格もきっとガッシリしていく。僕だつて大人になるんだ」

「コータ？」

言いたいことが分からず首を捻る私にコータが痺れを切らしたよう叫んだ。

「つまりこつまでも弟扱いされるほど僕は子供じゃないってことだよ！！」

言つだけ言つとズンズンスピードをあげて先に行くコータ。・・・・・
・弟扱いが気に入らなかつたのかな？

「やれやれ・・・難しい年頃だね。ふーむ、反抗期つてやつ？」

年頃を考えたら有り得るね。弟つていう庇護される対象に見られるのが我慢ならないつてことなのかな・・・・・。

「アキ姉！-！置いていくよ！-！

少し先でコータが立ち止まって怒鳴つてくる。・・・・・・・・勝手に先に行つたのはあんたでしそうが！-！カチンときた私は追いつくなりコータの首に手を回し頭に拳を念入りに押し付ける。

「うあつ！-！」

「勝手に先に行つた分際でなに偉そにしてんのよ

「ば、ばか！-！アキ姉！-！慎みをもて！-！」

なんでか顔を真っ赤にして暴れるコータ。・・・・なにをそんな

にこいつは恥かしがつていいんだろう？ 疑問符を浮かべた私に気付いたのかユータはひどく言いにくそうに真っ赤な顔でやけくそのように叫んだ。

「む・・・胸が顔に当たつてんだよーー！」

「……………へつ？」

視線をゆっくりと下に向ける。

ユータの顔は丁度私の胸の辺りに・・・・・・・って！！ 気付くと私は全力でユータを突き飛ばしていた。ついでに顔を真っ赤にして怒鳴りつける。

「のあーーーこのーーードスケベーーー！」

「自分から引き寄せたんでしょうがーー僕が殴られるのはなんかおかしいでしょーー！」

「な、人聞きの悪いことを言つなーー！」

事態を把握した瞬間、反射的に私は手を翻しユータの後頭部を叩いていた。

辺りに小気味いい音が響き渡る。真っ赤になつて怒鳴る私にユータが頭を押さえながら涙目で抗議する。だが、私の気がすまない。

「どやかましいーー！大人しく私の気が済むまで殴られなさいーー！」

「うあーんーーーアキ姉の横暴ーーー！」

逃げるユータを全力で追っかける。毎回毎回掃除当番をサボる男子を追っかけて鍛えた俊足を舐めるなーー！

ぐんと二人の距離が縮まる。恐らくはユータにとつては恐怖の距離。

「待ちなさい！！逃げると余計に刑は重くなるわよー！ー！」

「不可抗力だ！免罪だ！断固僕は無罪を主張する！弁護士呼んで

「うひさいー！私が黒といえば白も黒になるのよー！」

「僕は潔白だ~~~~~！」

ユータの絶叫が雪の散らつゝ冬空に響き渡った。

「で、全力疾走で学校まで追いかけてこしたあげくに相手には逃げられたと？」

肩で息をして登校してきた理由を説明し終わつた私に、親友の林疾風は校内外にもファンがいるという男前なお顔を微妙に歪ませていた。肩も振るえ口元は際限なく痙攣している。その様は普通の人間ならカツコイイとは言えないだろうがはやて君だと何故かカツコイイと思える。私は横目でふて腐れた顔のまま一言。

「はやて君・・・笑いたいなら笑つていわよ」

次の瞬間、はやて君は腹を抱えて爆笑した。身長百七十センチ以上あるはやて君が椅子の上で足をじたばたさせながら肩を震わせて

いる。そんなはやて君を何事かとクラスメート達が振り返るが私が振り返るとすぐさま目線を逸らす。ふん！なによ。そんなに怖がらなくてもいいじゃない。

一応言つておくがはやて君は「女性」である。父親似だという外見とそこの男より男前な性格と武道家だというお祖父さんの影響である時代掛つた喋り方に加え、双子のお兄さんと逆で届け出てしまつた「疾風」という名前のせいで誤解を大量生産するが事実である。

ええ、ええ。いいですよ。自分でも笑われるようなことをした自
覚はありますよーだ。

私がふて腐れているのがわかったのかはやて君はどうにか笑いのツボから復活を果たす。・・・目じりには笑いすぎて涙がたまつていたけど・・・。

「いや・・・相変らず雨沢の幼馴染どのは笑わしてくれる・・・」
二人で漫才師としてデビューしたら売れるのではないか?」

「はやて君。悪いけど全然うれしくないから。ていうか彼らは人を笑わせようと思っているわけじゃないし」

「本気なら尚のこと面白い。天然ものか」

「私は築地のマグロかー！」

ツボに入つたらしいはやて君がぶほつといつもの彼女からは考えられない顔で噴出した。

再び腹を抱え、爆笑するはやて君。それこそ水揚げされたマグロのよう机の上でひくひくしていた。

「素でここまで楽しげ」としてくれるのだから雨沢の幼馴染どのは一緒にいると退屈しない御仁なのだらうな」

まあ、確かに退屈はしない。だが、その『ぐいり』の騒動に巻き込まれるのは確實だ。

十六年間巻き込まれ続けた私が言つのだからこれほど説得力がある言葉はないと思つ。

「ははっ。確かに退屈はしないだらうけど振り回されて大変よ」

乾いた笑い声をあげる私をなにやら楽しそうにみるとはやて君が頬杖をついて人の悪い顔をしていた。

「ふふ。本当に振り回されているのはどうだらうな」

「・・・・・・はっ?」

謎かけのようなはやて君の言葉に眉を潜める私にはやて君は思わず見とれるような秘密めいた笑みを浮かべるのみであった。

「変なはやて君」

彼女の本意がわからなくて首を傾げていると教室の入り口辺りから「がんつ!」と聞くからに痛そうな音が響いた。

続いて聞こえてきたのは少女の「いたたた・・・」といづ声。聞き覚えのあり過ぎるその声に私はやて君は同時に顔を見合させる。

「これって……」

「あいつしかおるまい」

ともありなんと頷くはやて君。私たちは顔を見合わせ揃つたよう
に溜息をついた。

「いや……扉が、なんで開いていないのあ~~~~~???????

教室の引き戸が開けられ一人の小柄な女子生徒が鼻を擦りながら入
つてくる。

本当に小柄な……制服を着ていなかつたら小学生に間違いそうな
身長に普段はボザボザに伸びた髪のせいでわからない童顔を顔から
突つ込んでぶつかつた額を撫ぜるために珍しく晒している。

「……相変わらず、ドジね。椎ちゃん」

「回感だ。びついたらそいつ毎回毎回同じことばっかる」とが
出来るんだ。多須賀

私はやて君の至極真つ当な突つ込みに多須賀椎奈は涙の滲んだ
目で迫力のない睨みつけをしてきた。

「ふたりとも……ひどい……」

ずっと落ち込んでしまった椎ちゃんを一人で慰めていたらすぐ
にHRが始まった。

そんな中で今朝の出来事は私の中で薄れていった。
この時、私は彼が何を思っていたのか何も知らずにいた。
変化はすぐそこまで來ていたのに。

何も知らずにただ私は無邪氣な関係が永遠に続くとそう信じていた。

「ア～キ～姉！！今日暇？暇だよね！！だつたら僕と一緒に帰ろう！！僕、アキ姉と一緒に帰りたくて急いできたんだよ！！」

廊下から聞こえてくる大声にHRが終わつたばかりの級友達が何事かとザワメク。名指しされた本人は思わず机に顔を伏せた。

「呼んでいいぞ」

はやて君の声で顔をあげるがその先には笑い寸前の表情でこぢらを見ているはやて君の姿があつた。この笑い上戸め！！心の中で思いつきり叫ぶとこんどは椎ちゃんが例の害のない笑顔で柔らかく一言。

「アキちゃん好かれているねえ・・・・」

のほほんと結構的外れなコメントをする椎ちゃん。こんな好かれ方されても嬉しくない！！

「あの・・・・馬鹿・・・・・・・！」

唸り声のような咳きが私の口から漏れる。本気で怒つたわよ！コ一タ！！

こんな場所で大声で人の名前を呼んだりして！！

「ア～キ姉！！無視しないでよ～～～～～～～！」

今や教室中の視線が私に集まっているような気さえする。これと

言つのもあいつが人の名前を大声で連発するからだ。

ほつといたら際限なく恥じをかかされそだつたので私は鞄を手に廊下に出た。

「あ、アキ姉！！」

犬のように無邪気に寄つてきたコーダの頭に私は無言で拳骨を落とした。

「痛つ……なにするんだよ……」

突然の暴挙に涙目で反論していくコーダの襟首をムンズと掴むと私はそのまま早足で歩き出す。コーダがなにか言つてくるが無視だ。

「ち、ちよつとアキ姉～！放してよ～」

チラリと教室を見ればものすごく面白そうな顔ではやって君が小さく手を振っていた。・・・・・絶対に面白がっている。

せめてもの意趣返しに睨みつけてみるが逆に微笑ましそうに見られ、微妙な敗北感。

クスクス笑うはやて君の隣で椎ちゃんが事態に一人乗り遅れ顔面一杯に？マークを浮かべている。ああ、椎ちゃん。あなたのそういう所可愛くて好きだけどこんな時は少し羨ましいし恨めしいよ・・・。

そんなこと考えながら私は廊下をズンズン進んだ。

「アキ姉～！なに、怒つてんの？」

「怒つてない」

「うそだ～。怒ってる」

「怒つてないつてばー。」

延々同じ様な会話を続けながら私たちはいつも帰り道を歩いていた。

「アキ姉、絶対に何かへそ曲げている。アキ姉って怒ると眉間にキツチリ三つ皺が出来るんだよ」

思わず手が眉間に伸びかけ、コーダのにんまり笑いに一杯食わされたことに気が付いてむつとなる。

「思わず確かめようとしたところを見るとやっぱり怒つてたんだ」

得意げに喋るコーダにちょっととばかり腹が立つ。
私が単純なのかこいつが巧みなのか口喧嘩でコーダに勝ったことはここ数年とんと覚えがない。

「怒つてない！！」

ふんとそっぽを向いて歩き出さうとした私の腕をコーダの手が掴む。・・・なに?と振り返る。

「アキ姉これから暇でしょ?」

「ちよつと待て!!なにその断定口調ーーー。」

私が暇だと欠片も疑っていない辺りものすじく腹が立つ。もう、表

情からして私に予定がないって確信しているねこいつ……

「あれ? なにか用事でもあった?」

「ここと邪気のない笑顔で聞いているけどこいつ絶対に答えわかつて言っているよ。

ちょっとしたプライドからなんとなく下を向いて唸る私の手をコータが引っ張る。

「暇ならちょっと僕に付き合つてよ。楽しいもんみせてあげるか!」

そう言つてにやりと笑うその顔は小さい頃から散々見せ付けられた何か企んでいるときのこいつの定番笑顔で……私はぐんと濃厚になつた厄介事の気配に顔面蒼白になる。

「ひ、ちょっとひょっと……コータ今度は何を企んでいるのよ……!」

厄介事に巻き込まれてなるものかと吼える私を引っ張りながらコータは振り向きもせずに一言。

「僕にとって一世一代の大勝負があるんだ」

「はつ?」と聞きかえすが答えはない。

本気で一瞥もしないでグングン進むコータに私は何となく何も言えなくなる。コータの背中が何も聞くなと言つている気がしたのもあつた。

だけど一番の理由はコータが私の知っているコータと違つ気がしたからだ。

繋いだ手は温かいのにコータのことなら何でも分かっていると思つたのにこんな様子を見せられたら実は何も分かつてなかつたんじやないかと、そう思った。

「わあ～て一番田の田的到着～！」

「つて・・・」小学校じゃないのよ・・・それに一番田つて・
・・・

「まあ、気にしないのー卒業以来じゃない? 中に入れづる

グイグイと手を引っ張られ強引に小学校の中に入る。下校時刻を過ぎているのか校内に子供の姿はない。私たちは職員室で校内の見学の許可を得るとグラグラと中を見て回る。

卒業して四年以上たつとやつぱりどこか違う学校に少し感慨深いものを感じコータに手を引っ張られたままキヨロキヨロと辺りを見渡す。

「懐かしいね。ねえ、アキ姉覚えてる? アキ姉が六年生のとき修学旅行でさ」

「覚えているわよ。私の人生の中でベスト5に入るぐらいの悪夢だつたんだから・・・」

そうあれは私が小六コータが小五の時。長崎へ四泊五日の修学旅行に行くことになった私にコータが自分も一緒にいくとだだを捏ねたのだ。

どんなに説得しても叱り飛ばしてもまつたく屈せず「絶対一緒に行く!」の一点張りだったコータに私も両親も先生もえらく困った記憶がある。

あの頃からユータは私にベッタリで教室が違うことすらも納得がないようだつたのだから五日も私と離れているのが耐えられなかつたのだろう。

幾ら言葉を重ねても言つことをきかないユータは当口についてこようとするのを私とユータの両親が総出で止めて何とか私は修学旅行へと出かけられたのだが。

その時、私たちはユータを甘く見すぎていたのだ。

「あんた自分で交通機関を調べて後を追つてきたんだよね」

そう、出発したら諦めると思ったのが間違いでこいつは自力で追つかけてきたのだ。

ちゃんと宿泊先まで調べて、ちょこんと現われたユータの小学校五年生にあるまじき行動力と実行力に私は怒るより先にあきれ返つたものだ。

「そういうえばあんたなんであんな無茶したのよ。後で散々怒られたんでしょ？」

五日すれば帰つてくるんだからと言つ私にユータがなにやら酷く複雑怪奇な顔で振り返る。眉を潜め、じつと私を見る。

「な、なによ……」

「アキ姉は……本氣で鈍いよね……僕、あれで気付いてくれたかと思ったのにまったく全然気付いてないみたいだし」

「…………? 何に気付いてないって?」

顔に?マークが浮ぶ私をしばらく無言で見詰めるとユータは盛大

に溜息をついた。

「アキ姉に五日も会えないなんて冗談じゃないって思つたから追いかけたんだよ。怒られるとか後でどうなるかなんて全然考える暇なんてないぐらい強くそう想つたんだ」

一息に喋るとコータは言葉を切り何かに期待するように私を見る。その言葉に私は

「コータって昔から幼馴染離れ出来ないよね。あの頃なんて一番酷かつたし。修学旅行事件なんてその最たるものじゃない」

ガックリと前を歩くコータの肩が落ちた。その背中はなぜだか煤けて見える。

「コータ? なに? 私なんか変な」と言つた?

「い、やー別になんでもないよーーー。」

ヤケクソのよつてそつ脱がぶコータに私の?マークは増える一方である。

「こんなことで凹んでいたらアキ姉と一緒になんていられないとかぶつぶつと呟いていた。内容は声が小さすぎて私にはあまりよく聞こえなかつたが。

「でも、本当に懐かしいな・・・なんだかあの頃はとつても大きく見えていた建物がなんだか違つ風にみえるよ

「それだけ僕らが成長したことだよ。昔は世界にあるもの全てが大きく見えていた気がするのにね」

静かなコータの声に私は無言で頷いた。その後、子供の頃は身の回りにあるもの全てが大きく思えた。背が伸び、視点が高くなつただけでなく心も昔とは違う。だから学校の風景が違う風に思えてしまうのだろう。

「変わつてないつて思つていてもやつぱり変わつているんだね」

「やうだね・・・だけど変わらないものだつてあるよ」

繫いだ手がぎゅっと強く握られる。

「僕がアキ姉の側にいることは変わらない」

絶対に変わらないと自信満々に断言するコータに私は思わず微笑んだ。

「絶対に?」

「絶対。アキ姉が嫌だつて言つても僕は側にいるよ」

ものすこく真面目な顔で言つものだから句となく茶化せない雰囲気になる。

視線を外しながら私はぼそりと呟く。

「どうして・・・?」

「僕が側にいたいから。それだけだよ

迷いのない即答。コータの答えに何故だが一瞬、心が苦しく感じた。

それつきりユータはこの話題については触れなかつた。

側にいたいからと言つたユータの声は微かに緊張を孕んでいてそれが何かは分からなかつたけど彼が大きな決意を込めてその言葉を言つたことは伝わつた。だけど私にはそれが何を意味するのかまではわからなかつた。

小学校を皮切りに児童公園・よく遊びに行つた駄菓子屋さん・野原など子供の頃遊んでいた場所をユータは順々に回つていった。最初はぶつくさ文句を言つていた私だが懐かしい場所を回るにつれて昔話に花が咲き結局は一緒になつて楽しんでしまつた。

そして薄暗くなつていく夕闇の中、最後に訪れたのは小さな丘の上の大木の下。

古い記憶が私の中に蘇る。

「懐かしいね。『秘密の場所』だ」

目を細め、眼下に広がる街並みを見る。ここは街の中で一番景色が綺麗な場所。子供の頃の私とユータだけの「秘密の場所」。昔は毎日のように遊びに来ていた場所だ。

あんなに大好きな場所だつたのに不思議と思い出さなくなつていた。

「アキ姉・・・覚えている?僕が昔じいじアキ姉とした約束」

また、古い話を持ち出してきたな。確かあれつて私が小学校上がる前的话だつたよ。

クスクスと緩みそぐになる口元を何とか引き締めながら私は「もちろん」と答える。

「『ずっと大人になつても側にいる』そう、約束したよね」

それは他愛の無い子供の約束。

『指きりげんまん嘘ついたらはりせんぽんの～ます！指きつた
！』

幼い声が耳に蘇つてくる。

「思えばコータとはあんたが生まれた時からの付き合いでよね。
本当に長い間一緒に過ごしてきた」

「うん・・・そうだね・・・」

大きな木の幹に寄りかかって空を見上げる。コータも同じように
寄りかかる。二人背中合わせに暮れしていく冬の空を見上げていた。
頭の上で夜風が梢を鳴らすのをただ一人、静かに聴いていた。

「きっとさ、こらからもずっと同じように一緒にいるんだろうね。
あの約束通りにさ」

大人になつても私たちの関係は変わらない。お隣同士で幼馴染で
コータは甘えん坊の弟分。

賑やかで楽しい日々。

懐かしい約束を思い出し私はそんなことを口にしていた。コータ
も同じ気持ちだと疑いもせずに。

「・・・『同じ』？」

手痛いしつべ返しはすぐにきた。

ひびく低いユータの声が聞こえたかと思つと耳のすぐ側で「バン」と幹を叩く音がして、私は肩を震わせた。

気付くと私の目の前には怖い顔をしたユータが幹に手を付いて立っていた。

「ユ、ユータ？」

ドクンと心臓の音が聴こえた。いつもと明らかに雰囲気の違うユータに私は動搖して声が上擦る。そんな私を見たことのないような冷たい目でユータは見ていた。

「『同じ』が・・・いいの?」

ユータの手が私の髪を一筋つまみあげ、そしてそのまま頬に触れた。触れられた途端に電流でも流れたように私の体が震えてしまう。そんな私を見てもユータは何も言わずに少しだけ目を細めた。

「僕は・・・『同じ』じゃ嫌だ」

ユータに触れられた頬が熱い。胸の奥で何かがざわついている。予感がした。

ソノサキラキイテハイケナイ

「俺は『変わりたい』。僕は貴女のことがずっと・・・」

「駄目!!」

気付いたらそう叫んでユータの胸を押していた。駄目だ。聞いて

はいけない。聞いたら変わらないといけない。

「アキ……」

耳を塞いで必死に頭を振る。

「お願い、言わないで……」

ユータが何を言おうとしているのか分からなければ聞くのが怖かつた。

聞いたら終わってしまういそうで。

もう一度と今の関係には戻れないと理屈でなくせり話っていた。

「お願いだから……」

変わりたくない。壊したくなんてない。

「…………壊さないで」

この心地の良い関係を。

ぎゅっと強く目を瞑つていたからその時、ユータの顔にどんな表情が浮んでいたのか私は見なかつた。

「…………」

小さな謝罪と共に私の体はユータの腕の中に閉じ込められた。冷え切つた身体にユータの体温がよく感じられた。

昔は私の方が身長も体格も大きかつた。子供の頃のユータは華奢で女の子みたいでそんな彼の前を歩いて私は手を繋いで引っ張つていた。なのに今、私の身体はユータにすっぽりと納まつている。強

い力。大きな手。一つ一つが自分とはまったく作りの違う身体。私の知っている……いや、知っていると思っていたユータとは全然違う。

朝にユータに身長を抜かされていることに気が付いた時のあの寂しいような驚きのようななんとも説明できない気持ちが再び出てくる。それも朝より何十倍も強く。

『僕はアキ姉の「弟」じゃない……僕は「男」だよ』

ああ、あのセリフの意味は……。

「僕は壊すよ……」

何もかもが分かつてしまつた。ユータが何を言いたいのか、なにを壊すのか……なにを望んでいるのかを。

胸が苦しくて涙が零れた。抱きしめられていたからユータの顔が見えない。それに私は心底安心していた。

だから覚えているのは声と強く抱きしめられた感覚とたつた一つの言葉。

「好きだ」

そのたつた一言だけが私の中に刻みこまれた。

ずっと側にいて、とても居心地のよい関係だつた。ずっとずっとそれが続していくんだと疑いなく信じていた。

学校を卒業しても大人になつてもずっとこのままでいられるとう、思い込んだ。

私は「変わらない」と信じていた。でもユータは違つた。

彼は「変わること」を望んでいた。そして変えるための言葉を彼は紡いだ。それまでの関係が崩れることを覚悟の上でユータは自分の想いを私に伝えた。

私たちの関係は壊れ、そして再び築き直していく。
でも叩き付けたガラスが元通りには戻らないように私たちもまた同じ関係には戻れない。

直つたそれがどんな姿になるのかは私の出す答えで決まる。

ドアを開けるなり私は服も着替えずにベットに倒れこんだ。何もする気が起きない。考えるのがひどく億劫だった。

ボンヤリと床に放り投げた鞄を見ていた。

ユータの告白の後、私はユータを突き飛ばすとそのまま走つてその場から逃げ出した。

いま思えばかなり酷い対応の仕方だ。責められても仕方がない。だけど、ユータは私を追いかけては来なかつた。・・・・・正直、心底安心した。

「バカ・・・いきなり何言つてくるのよ・・・」

いつからそんな対象として見られていたのだろう。どうして私だけなんだろう。

ユータはあの関係を壊すのが怖くはなかつたのだろうか?

考えるのが億劫だつたのにも関わらず気付くとユータのことを考えているのに気付き私は顔を枕に埋めた。

いやだ。考えたくない。何も、考えたくないの。涙が出てきて止まらなかつた。

声を押し殺して枕に顔を埋めてどれぐらいたつただろうかトントンとドアをノックする音と共に母さんが入ってきた。

「秋、ちょっといい……つい貴女制服のまま寝ていたの？」

驚いたような母さんが声に返事をするのも億劫で私は黙つて頷いた。

そんな私を母さんが心配気に見つめる。

「大丈夫？ 調子でも悪いの？」

枕に顔を埋めたまま口走りしようと……・・・突っ込まれたら答えられないと気付き頷く。

嘘を付くのは心苦しいがここは騙されてもいいたい。
絶対に本当のことは言えないから。

母さんはやはりと困ったように頬に手をやつた。

「あらあら・・・なんだか勇太くんが貴女に用があるって今、下に来ているんだけど・・・どうしよう？」

「勇太」という言葉に体がびくんと震える。どうしようとも心が苦しくなつて引っ込んでいた涙が再び滲んできた。
ぎゅうとシーツを強く握るとどうにか冷静な声を作れた。

「・・・悪いんだけど・・・どうにも、調子が悪いから・・・母さん代わりに用事聞いといてくれる？」

一生懸命いつも通りなんともない声を出そうとするがやはり完全に動搖が隠せない。だが逆にそれが調子の悪い印象を強めてくれたのか母さんが納得してくれた。

「そうね。じゃあ私が聞いとくわ。後で夕飯を持ってきてあげる

から服を着替えてベッドに寝ときたな」と

「うん……」「めんな。母さん」

「？」「この時はアリガトウでしょ、変な子ね」

ふふと笑いながら出て行く母さんの後ろ姿もつい一度だけ小さく
「ごめんね」と囁く。

不意に頭が熱くなつた。あ、と思ったときには大粒の涙が握り
締めた拳に落ちて弾けた。

「…………最低…………」

本当に私、最低だ。でも、逢いたくなかった。逢つてもどうこう
顔していいのか分からない。
でもそう考える自分が自分の気持ちしか考えてないのもわかるか
ら余計に自己嫌悪が強くなつていく。

「本当に…………最低だつ！私！」

自分が傷つくのが嫌だからコーダを傷つける方を選んでいる。
ぱたぱたと止まらない涙が嫌だ。泣くなんて私らしくない。泣く
よりももっと適切な行動があるだろうと思うのにただ泣く以外でき
ない。ノロノロとカーテンを開いて下を覗く。母さんに小さく一礼
しているコーダが見える。ほんのついさっきまでコーダと一緒にい
てそして告白されたなんて嘘みたいだ。
こつんと窓におでこをくっつける。

ひんやりした感じが気持ちいい。

夢だと思っていた。だけど、夢じゃないんだ。

「…………」

コータがコツチを見上げる。一瞬だけ瞳が合つた。その瞳に得体の知れない恐怖を感じて私は黙つて カーテンを閉めた。閉めて、そのままその場に崩れ落ちる。握りこんだ拳に涙が落ちて弾けた。どうしようもない気持ちに私はただ泣き続けていた。

ジャンジャンジャン!!

突然鳴り響いた軽快な音に涙が引っ込んでしまう。床に投げたままの鞄の中から聞こえてきていた。

「あ、携帯……」

着信を見るのはやて君からだつた。

通話ボタンを押すと相変わらずの美声が聞こえてきた。

「雨沢か?夜分遅くにすまない

いつものはやて君の耳に心地よい声が携帯から聞こえてきて私の目がまた潤んでくる。

「はやて君…………」

「宿題の事で少々聞きたいことが……雨沢?どうした?声が沈んでいるぞ?」

気遣うよつなはやて君の声に甘えたくなる。だけどべつと堪えて私はなんでもないと口にした。

はやて君はしばらく黙り込んでいたがやがて用事を切り出し私は短くそれに答える。

「そうか・・・ありがと。とにかく雨沢。ここから先は自分の
独り言だから気にするなよ」

「え？」

突然のことで私は目が点になつた。

「苦しくなつたらいつでも頼れ」

「つ！！」

全部、見透かされたかのようなセリフに堪えていた涙がまた溢れ
出す。必死に嗚咽を堪える私に気付いているのだろうけどはやて君
は触れないてくれた。

優しい低めの声が私の耳を擦る。

「自分はいつだってお前の味方だから愚痴も弱音も悩みも何時間
だって聞いてやる。どうしようもなくなつたらいつでも呼べ。どん
な時でもどんな場所からだつて駆けつけてやる」

「はや・・・て、君・・・」

「なんだ？」

優しい私を気遣ってくれていると分かる声が心に温かく染まる。

「独り言だと言つただろ？礼を言われる理由が分からないな

「独り言だと言つただろ？礼を言われる理由が分からないな

優しい親友はおどけてそう言った。

私は涙を拭うといつものなりに懐まれ口を叫いた。

「はやて君が男だつたら私絶対に惚れていたわ。ものすうい口説き文句だつたもの」

「・・・・・口説いたつもりはない。純粋な励ましのつもりだった。それに私は女人を口説く趣味がないと何度も言えば理解する」

憮然とした口調から眉を顰めたぶつちよう面が思い浮かぶ。きつと電話口で苦り切った顔をしているに違いない。

「無意識のタラシが一番たち悪いわね」

「あははは。コメンコメン！」

「まあ、いい。元気が出たみたいだしな。何があったのか知らんが落ち込みすぎるなよ」

「うん。ありがとう。…………お休みなさい」

「ああ、また明日」

はやて君のおかげで気持ちが大分浮上していた。

私は立ち上がるべランダに出て身をのり出してお隣を見る。隣のコーラの部屋がよく見えるが寝ているのか電気がついていない。昔はベランダからよくお互いに行き来していたけど中学に上がる頃

にはさすがにしなくなっていた。

じつとコーダの部屋を見つめる。いま、あそこにコーダはいるのだろうか？なにを考えている？

物思いに耽ってしまう。

コーダの気持ちに対する答えはどうなのだろうか？

コーダの「好き」と私の「好き」。

違いはなに？

私はどうしたいの？

コーダとどういう関係を築きたいの？

自分に問い合わせてみても答えは返ってこない。

冷たい夜風だけが私の耳元を通り過ぎていった。

教室に入った私を見るなりはやて君と椎ちゃんが田を丸くした。

「・・・・雨沢。田の下がす」「こになつてこるぞ」

「眠気覚ましのガムがあるよ?食べる?」

椎ちゃんがくれた眠気覚ましのガムを噛みつつ私はチラリと昨日の出来事を思い返す。

その後、布団に入った後もずっと眠れず、一晩考えても答えは出なかつたのは我ながら情けないとと思う。

今朝、コーダは迎えにこなかつた。多分、昨日自分の気持ちを暴露してしまつたから顔を合わせづらいからだと思つ。それは分かるわよ。だけど。

「いい逃げつて卑怯じゃない・・・」

知らず知らずのうちに頬がふくれつ面になる。

卑怯だ。それにこの問題になつたらどうもアイツに主導権握られているような気がするし、いつものようにポンポン物言えないし心臓はバクバクするし顔は赤くなるし本気で心臓破裂して死ぬんじゃないかと思うようなセリフやら行動やらが増えているし！告白から今までを振り返つてみると出るわ文句。溢れんばかりである。

「ねえ、はやて君・・・アキちゃんが百面相しているよ？なんで？」

「何かあつたのは確かに自分が自分にも詳細はわからん。しかし実に興味深いな。一つとして同じ表情をしない」

冷静に観察している友人一人には気付かないで私はユータへの文句をツラツラと心中で挙げていた。

そうよ。大体、ちょーっと前まで泣きながらアキ姉アキ姉つて私の後をついて来てくせにいきなり全く知らない男の子の顔して。

「するこじゃない」

「Jつちは弟分とか幼馴染としてのユータしか知らなかつたのに不意打ちもいいところだ。あんなの見せられたら・・・動搖するのは当たり前じやない。

「本氣で・・・するこよ」

忘れられない表情ばかり見せて。Jつちばかりドキドキさせられて本氣でユータはズルイ。

「あ～…わからん…本気でややこしな…おこ…」

頭を抱えて叫ぶ私をはやって君と椎ちゃんがギョシと見ると伸びそこそ顔を寄せ合つ。

「これは、相当重症？」

「う～む。昨日、一体なにがあつたんだ？」

一人とも私の相談に乗ってくれる氣、あるの？ないの？ていうか微妙に一人が私から距離とつていて見えてるのは氣のせいですか！！

「いや、今日の雨沢はどうか言動がぶつ飛んでいるから近寄りがたいのだ」

「う～ん。アキちゃん…顔がとつても悩んでいるよ？」

それってなにですか？今日の私は奇行が多いんで近寄りたくない？それに椎ちゃん…悩んでいる顔の人間から貴女は距離をとるのですか？

いかん。寝不足と悩みすぎで思考回路がネガティブになつていて。ブンブンと頭を振つて氣をしつかり持とつとするが目の前が益々クラリとただけで何も効果はなかつた。って、あれ？本気で田の前が真っ暗に…・・

「おい！雨沢！！

「アキちゃん！」

慌てたような一人の声もどこか遠くに感じる。

ああ、そういえば昨日から何も食べていない・・・・。

夕飯・朝ごはん抜きに加え寝不足だもんね。そりや田も回るわ。

納得。

チャイムが鳴り、はやて君と椎ちゃんが心配そうな顔で保健室に現われた。窓の外を見ると夕日がグラウンドを染めていた。・・・・。どれぐらい眠つていたの？

二人は私が教室でぶつ倒れたので慌てて保健室に抱き込んだことを教えてくれた。ついでに私が丸一日眠りこけていたことも教えてくれた。

「原因は寝不足と貧血だ・・・自己管理がなつてないぞー！」

はやて君・・・顔がすごく怖いんですけど・・・。

「アキちゃん！－本当に本当にほんとうに心配したんだからね！－保健の先生は大丈夫だつて言つてたけどものすごく青い顔してて手とかすごい冷たかっだし・・・全然目、覚まさないから怖かつたんだから！－！」

ポロポロと大粒の涙を流しながら私にしがみ付いて来る椎ちゃんを抱きとめながら私はものすごく一人に心配を掛けたんだなと実感した。

「『めんね・・・心配かけちゃって』

「本当だよ」

「まつたくだ」

打てば響くように二人がそう返していく。そのタイミングのよさに思わず私は噴出してしまい。続いて一人も笑いだし保健室に三つの笑い声が響いた。

ひとしきり笑つた後、はやて君が真剣な顔で切り出した。

「で、何が原因でぶつ倒れるまで考え込んだんだ」

「ふはっ！ いきなり直球勝負ですか！ はやて君…！」

「あ、私も知りたい……！」

絶対に私が心配とかじやなくて好奇心から訊いているでしょ！ 椎ちゃん！！

「……………！」

真っ赤な顔で俯いて私が洗いざらい白状するまでそんなに時間はいらなかつた。

「……………！」

話終えると二者二様な沈黙が場を満たした。

「想像以上、だな。大分煮詰まつているとは思つたがそこまでとは……」

「えっと・・・アキちゃんは幼馴染くんで告白されてそのことで寝食忘れて悩みに悩んでその拳句教室でぶつ倒れてはやて君に運び込まれたんだね」

なんか自分の行動を第三者の視点から言葉にされたのもすげ恥ずかしいんだけど！

シーツと握り締めて悶絶しかけている私を無視して「ふむ」と腕を組み考え込むはやて君。

「ここで問題なのは雨沢が幼馴染殿をどう思っているのか答えが出来ない」となんだな？

頷く私にはやて君は「難しい問題だな」と口元に手をやつた。

「恋とこいつもは厄介なものらしいからな・・・」

しみじみとやつ言つはやって君の物言いはびいか物語を語つていてるみたいで実感はない。

「まあ、難しい問題なのは確かだ・・・。」ればかりは数学のようにな決まった答えがあるわけでもないらしいからな・・・」

なんかよく考えてみれば私も椎ちゃんもはやて君も恋愛関係はまるきり縁がない人生を送つてきているのよね。

「いや、相談する相手を間違えた?と思いついたその時、私の制服の裾をクイクイと引くものがあつた。横を見ると椎ちゃんがきらきらと私を見上げていた。

「・・・・椎ちゃん?」

私の背筋になにやら嫌な予感が走る。

同じ不穏なものを感じたのかはさて君が心持ち身を引くがそれよりも速く椎ちゃんが私の手を取る。

「あのね。アキちゃん。私思つんだけど…………頭で考えるのをやめてみない?」

「…………はあ?」

うるん気な声が別の口から一いつあがつた。そんな友人一人を椎ちゃんは真剣なだけど目だけはキラキラさせながら握り拳で語る。

「ほら、アキちゃんです、…………、頭いいじゃない?」

なんかいきなり脈絡のない話に跳んだな……。

「それに計画性もあるし、しつかりしてるし、みんなのリーダーって感じじゃない? アキちゃんって物事を論理的に考えていくですよ?」

確かに私は計画を立て、実行し問題があればそれを解決するための最良な手段を考える。だけど、これとコーナーの皆とどうんな関連性が……?

「でもね。恋愛ではそれって逆に邪魔なの」

まるで私の思考を呼んだかのような椎ちゃんが意気込んで答える。

「恋愛って頭で考えるものじゃなくて心。感情で感じるものなの

「

「え、で、でも・・・・・」

「でもじやないの……せひ、どつかの誰かも言ひたじやない。
考えるより感じるんだー」「トーー」

いや、それ、多分恋愛の」とじやなこと理解つよ。
突つ込みそつこなる私を遮るよつてお姉ちゃんがここに続ける。

「ねえ、アキちゃんは幼馴染くさんの」と、好き? 嫌い? シンプル
に考えてみて」

柔らかいのんびりとしたお姉ちゃんの口調に飲まれたのが私は随分
と素直に彼女の言つとおりにしてみた。でてくる答えは。

「好きだよ。・・・・」
「好きだよ。・・・・」

わ~、「好き」なのだ。それだけは間違いない。

「じゃあ、一緒にこでキデキしたつある」

「そりゃ・・・・」
「おれがおれだからアヒトでキデキしませんでしたし・・・・

「それに?」

「それに・・・・なんだかコーダが違つ風に見えて困る」

「どんな風に見えるの？」

「Jの時私は自分のことで一杯一杯で椎ちゃんが私を誘導尋問していることも外で立ち聞きしている人物がいることも全く気付かなかつた。」

「…………まつたく知らない男の子に見える。ずっと弟みたいだつて思つていたのに急に全然知らない男の子に告白されたみたいで・・・どうしたらいいのか分からなくなる。確かコータのはずなのに私の知らないとこ一杯あつて困る」

椎ちゃんが慰めるよつて私の肩を叩いた。

「アキちゃん。最後の質問。今、幼馴染くんのこと弟のよつだつて思える？」

私は言葉の意味を考えるよりも早く答えていた。

「・・・・・思える訳ないじゃない！――」

思えるはずがない。思えない。理由なんてわかんないけども、そんな風には思えない。

「そつか・・・私はアキちゃんの気持ちわかつちゃつた」

「・・・・遺憾ながら自分も」

驚いて顔をあげると二人はじょうがないなと言わんばかりの表情で保健室の外に声を掛けた。

「という訳だからあとは君の頑張り次第~~~」

「お膳立てはしたのだから上手く生かせよ」

私が事態を把握するより早く出て行く二人に入れ違いに入つてき
たのは・・・・。

「ユータ……………なんで……………」

「アキ姉が倒れた時点であの一人が血相変えて僕のところにやつ

それから休憩時間ごとに様子を見に来ていたとユータは言った。

叫ぶ私にユータは困ったように頬をかいた。

「うん・・・」めん。全部聞いていた

恥ずかしそうなーーーーー

真っ赤になつて思わず叫んだ私にコータが慌てて近寄りつゝする
もんだから私はさうに叫んで彼から距離をとる。

あれ?なんだかつへ・じつへしてだれつへ・なんだかものめじく恥ずかしいですよ?

さつき自分が言つたことを思い返し、羞恥心で死んでしまいたくなる。

恥ずかしさの余りコーダから逃げた私だつたけどどうやらコーダにはそれが気にくわなかつたらしく彼は怖いほどの笑顔で私のいるベットに乗ってきた。

「ち、ちょっと……ユータ……！……何考えてんのよ……！」

「アキの方こそなに考へてゐるの？」

にやにやと意地悪そうに聞いてくるコーダが心底憎い。つていうか絶対にこいつ分かつていて聞いている！

フ！ゴータのドスケベ！！」

氣付いたら顔を毛布で隠しながら悔し紛れにそんなことを叫んでいた。だけどコーラはしつとしたもので。

「男は皆好きな女の子の前では助平なものだよ」

「...」

「コーダの言葉にかつーと頬に熱が集まるのが分かる。ますますもつて毛布から顔を出せない。駄目だ駄目だ。どんな会話をすればいいのかどうかどんな顔をすればいいのかすらもわからぬ！」

「アキ」

びくりと肩が震える。声が意外なほど近くから聞こえてきた。

「僕のこと弟に見られないんだ？」

酷く嬉しそうなその声に素直に頷けずに私はただただ布団を掴む手を強める。

「それって男として意識しているみたい」とへ。

「ち、ちが、そんなんじゃなく・・・・」

思わず顔を上げて否定しようとした私だがコータの顔を真正面から見据える破目になり再び顔が真っ赤になる。

「そ、そんなんじゃなくて・・・・これはその・・・・」
・・・

声がどんどん萎んでいく。気持ちがぐるぐるする。どんな言葉を言えばいいのかどんな顔をすればいいのか誰か教えて欲しい。

「私は・・・・」

心臓がドキドキする。何を言いたいのか自分でもわからないのに何か、伝えたい。

大切な何かを伝えなきやいけないので。

「私・・・・」

グルグルする思考。考えても考えてもわからない。
答えが見つけられない。

『恋愛って頭で考えるものじゃなくて心・感情で感じるものなの

椎ちゃんの言葉がぽんと頭に蘇る。

考へてもわからないのなら・・・・なにも考へず心で行動してみたら?

親友の柔らかな笑みを思い出すと嘘のよつて動搖が治まつていく。コータが私を見ている。

私は、彼を、どう思つてこる?
心はどう感じている?

「アキ?」

気付くと近くにコータの顔がある。

見慣れた顔。だけど見慣れない表情を浮かべるよつになつた少年。私を好きだと言つ人。

関係が崩れてしまつと思つた。

変わつてしまつことが心底怖かつた。

いろんなことを言い訳にして自分の気持ちを見ない振りしていた。でも、崩された。知らないふりはもつ、できない。

私は・・・・私は。

「・・・・・・・・」

意識せずに零れた言葉に私は口を押される。

いま、なんて・・・・・・。

自分の言葉が信じられずに動搖が胸の中に渦巻く。

「アキ。いま・・・・・・・・」

信じられないというコータの顔をみると先ほどの咳きは彼の耳にもぱっちりと届いてしまったのは疑いようがない。

「違う……」

猛烈な羞恥ずかしさに襲われて私は思わず否定の言葉を口にする。だがコータから確信めいた表情は拭えない。

「今、好きって……」

「気のせい……」

必死になつて否定するがすでに遅いことは自分でもわかっていた。

「アキ」

「違うってば……」

否定すればするほど泥沼にはまつていく気がした。

「違わない」

断言されて否定の言葉を奪われてしまふ。

「わ、私は……」

「僕はアキが好き」

幸せそうに好きだといわれ一切の思考が奪われる。その隙を突くかのようにコータの顔が近寄る。

柔らかなその笑顔に不覚にも田が奪われた。

「アキも僕が好き」

「うつんと額が合わむ。

「西想いだ」

そんなことを本当に幸せそうに言つてくるコーダを本氣でじばき倒したかった。

そんな優しい田で見詰めたり優しく抱き寄せたりしなければ遠慮なく殴っていたのに。今はどうしても手が動かない。突然自覚した想いを受け入れるには私の心の準備というものがまるで出来てなかつた。

コーダが言つていることが真実でもそれを認めるにはまだ動搖が大きすぎて覚悟がなれ過ぎる。

なのに。

「どうかアキは僕が好きなんだ」

どうしてこのままうちの動搖も知らんと追い詰めるようなとばかり……

「うれしいな」

本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる男に本気の殺意が湧いてくる。好きだと自覚した途端に殺意が湧くのを止められない。

「アキ。顔が怖いよ」

からかうよ^ううなコータの言葉にぶちりと理性が千切れ飛んだ。
さつきまでまつたく動かなかつた手が嘘のように軽やかに私の意
思を汲みぶんと風をきる。

「ばかあーーー」

散々私を動搖させてくれた少年の頬を私は力の限りひっぱたいた。

「ねえねえ。あの一人うまくい^つたかな?」

「・・・まあ?でも、まあ、つまくいきそつだろ」

「アキちゃん自覚まであと一息つて感じだつたもんね!」

「認めたら認めたで全力で否定しそうだけどな」

なにせ天邪鬼だからなあいつは。

そんなはやて君の言葉に椎ちゃんも頷く。

「でも最終的には幼馴染くんが押し切りそだよね」

「だな」

親友二人が勝手にそんなことを言つている頃。噂の本人は・・・

「違うつたら違つーーー」

好きだと自覚した相手に全力ビンタを浴びせ、そんな捨てセリフを残して保健室を飛び出していた。

コーダのことを考へるとドキドキする。
側にいるとどうしようもなく安心する。
好きだと自覚した途端自分が相当昔から彼のことが好きだったのだとわかり本気でうろたえた。

「う、うあ……」

ずっとずっと本当にこれが今までこの感情は幼馴染に向けるものだと思っていた。

「思い込みって怖い……」

全力で逃げて、空き教室に入り込んだ私はそのまま扉を背にする。すると崩れ落ちた。

本当にどうしてこの気持ちを自覚せずにいたのだろう。

今となつてはそっちの方が不思議でならない。

悶々としたものを感じる。真っ赤な顔で膝に顔を埋める私のスカートのポケットがブルブル震える。

「？」

ポケットに手を突つ込むと携帯を出す。その液晶に出ている名前に田をやり私は思わず「げつ」と呻いてしまつ。

「や、コーダ……」

ブルブルとまるで相手の怒りを現しているかの如く携帯は震え続ける。出たくない。出たくないがこのまま無視したあとの方が怖い。

「・・・もしもし」

恐る恐る通話ボタンを押して電話に出た私の耳を和やかなユータの声が撫でる。

「アキ?」

だが、その和やかな声からどうしようもない怒りを感じるのは私の気のせいだろうか?

「晴れて両思いになつた恋人にビンタ食らわせて逃げるなんてい度胸しているね」

ツツツ!!(ビンタ)満載な第一声だつたけど電話から伝わってくる威圧感に負けて私は一言も発することができない。

蛇に睨まれた蛙をまさか声だけで体験する破目にならうとは思わなかつたわ。

「今、ビンタ?」

表情が見えない分声の不機嫌さがダイレクトに伝わつてくるのが怖い。

「い、言わない」

すんと冷氣が増したのが電話越しでもはつきりと分かつた。

「・・・・・・アキ?」

閻魔大王が目覚めた。

心臓に氷でも突き刺されたような気分になる。だけじゃで負けではない。

せめて、私がもう少し平常心になれるまでは離れていたい。ここでコータに見つかったらそんな些細な願いなんて叶わないに決まっている。

「もう一度言つよ。こま、ビニ、いの？」

一言一言をわざわざ区切つて言つ辺りに彼の苛立ちを感じる。

「絶対に、言わない！」

私の目はもう、涙目だった。
なんでどうして・・・好きな男の子からの電話をこんな怖い思いで聽いているんだ！！

「ふ～～～ん」

電話の向こうで相手は少し不機嫌そうに鼻を鳴らす。
声色がガラリと変わった。

「絶対に見つける」

そういうなり電話が切られる。一つ一つとこいつ音にビビりつつも
ない恐怖が沸き起つてくる。

「うちの・・・」

心情ぐらい読み取つて氣をきかせろーー

「ひなつたら意地だ。なにがなんでも逃げ切る。絶対にコータに捕まつたりなんかするか！－

乱暴にポケットに携帯を突っ込むと私は教室を飛び出した。

鬼ごっこだ。

小さな頃いつもコータと遊んでいたお気に入りの遊び。
でも、今度の鬼ごっこはあの頃とは違う。
鬼は私を捕まえたら一度と離してくれない。
鬼に捕まつたら嫌でも私は面と向かって口に出さないといけなくなる。

「好き」

その言葉を彼に。

そして鬼ごっこの結果は 。

「捕まえた－－」

鬼の嬉しそうな声が校舎に響いて力強い腕が私を抱きしめた。

おまけ

あの日から2年。

私の周りも色々と変わった。

例えば

高校を卒業して大学に入った。

一人暮らしを始めた。

そして

「アキ」

幼馴染から恋人になつた少年の私の呼び方から「姉」がとれた。

あの日から2年。

僕の周りも色々と変わった。

高校三年生になった。

身長が百八十を越えた。

そして

「ユータ」

一人暮らしを始めた幼馴染の彼女から部屋の鍵をもらえた。

僕の好きな人は人が良くて意地つ張りで天邪鬼。

だから僕は素直じやない恋人の分まで「好きだ」と言葉で行動で

伝える。

だけど・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・すき」

俯いて絶対に僕の顔を見ないでそんなことを言う恋人の一言の威力には絶対に勝てないんだよなあ・・・。

私の好きな人は甘え上手でたまに腹黒くでも最終的に私に甘い。彼の過剰な言葉とスキンシップのせいで私は全然素直になれない。だから・・・・・・・。

絶対に顔を見ないでその背中に額をくっつけながら小さな声で「・・・・・・・・・・・・すき」

つて言うのが精一杯。本当はもっと言つてあげたいのに。

結局私は愛情表現という点では絶対に恋人に勝てないのよね・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6251u/>

幼馴染

2011年7月5日12時18分発行